

千葉支部 2022 年度第 2 回資格更新研修会資格更新研修会 報告

2022 年 10 月 30 日(日)13 時～16 時 Zoom 配信によるオンライン研修会 参加者 54 名
「コロナ禍が子どもの認知やコミュニケーションの発達に与える影響について」

上記のテーマに基づいて、前半にさまざまな立場の方々から話題提供していただき、後半に東北大学 加齢医学研究所 川島隆太先生をお招きし、ご講演いただきました。

1 話題提供について

①私、田原佳子（東上総教育事務所）からは、コロナ禍における聴覚に障害がある子ども達の状況についてお伝えしました。口形や表情を見る事が大事ですが、マスクで見えない中で、話を理解しコミュニケーションしているため、豊かな言葉や心を育てることが難しい状況にあることを知っていただきたいと思います。

②大槻美智子先生（香取市立東大戸小学校）からは、コロナ禍での小学校の子ども達の現在の状況についてお話があり、10月現在、学校生活のさまざまな規制が解除の方向で動いており、行事や歌唱指導等、できる形を模索しているとのことでした。子ども達の表情が乏しくなったり友達の顔が覚えにくくなったりしているそうです。

③佐々木郁子先生（千葉県立君津特別支援学校）からは、コロナ禍の下での特別支援学校の子どもの状況についてお話があり、さまざまな経験をする機会が減ったり体を動かす場所の制約が大きく運動不足が心配になったりしているとのことでした。訪問教育についてのコロナ禍の下での良い面や問題点についてもお話いただきました。

④関口薫先生（白井市子ども発達センター）からは、療育施設でのコロナ禍でのエピソードを織り交ぜながら、感じておられることについてお話がありました。活動に制限が出たり子どもが使った道具の消毒に職員が追われたりしており、構音指導を受けに来る子が急増している中で、改善し終了する子が減っているとのことでした。

⑤松川節理子先生（富里市健康推進課）からは、就学前の幼児に関するコロナ禍でマスク着用による影響について関係者の聞き取りやご自身の感じていることを元に、発音や発話への影響の大きさ、大人や言葉でのやりとりへの意識の低下、人を認識するための情報低下等、コロナ禍しか知らない子ども達の成長を危惧されていました。

2 川島隆太先生の講演

まず、脳の働きと発達についての基礎知識について脳の図を元にわかりやすく説明していただきました。思考の脳は3歳までと思春期以降に大きく発達し、3歳ぐらいまでの家庭での経験と、中学生以降の生き方で考える能力が育まれるということです。親子の会話が子どもの脳を刺激し、ほめる声かけで脳の活性化が強まり、意欲が高まるということをお話

の状態から説明していただきました。

印象深かったのは、インターネット習慣が多い小児は3年後の広範な領域で大脳皮質の体積があまり増加しないという結果を、3年間200名以上の被験者にMRIを用いて計測して出されていることです。ICT社会の危険性について根拠に基づいて述べておられます。

そして、最も重要だと感じたことは読み聞かせはこころの脳を育み、言葉の数・聞く力が増加し、子どもの問題行動や親ストレスが減少するということです。読み聞かせによって、親子の愛着形成が促進され、子どもの安全基地が形成されたとのこと。さらに、読み聞かせにより読書習慣がつくと言語を扱う大脳の左脳がより発達するというデータに基づいたお話も心に残りました。

今後、ICTのよりよい活用方法を考えていくことが重要であるとともに、スマホやLINEだけではなく、子どもと直にふれあうというアナログの方法も大事にしていかなければならないと考えさせられました。

(田原佳子)